

蒲生慶一先生を悼む

栗田 博之
KURITA Hiroyuki

東京外国語大学名誉教授
Tokyo University of Foreign Studies, Professor Emeritus

Quadrante, No.24 (2022), p.17.

蒲生慶一先生には長きにわたって本学の点検・評価を担当して頂いた。実は私が蒲生先生を点検・評価活動に巻き込んでしまったのである。

池端雪浦学長時代に高橋正明先生の後任として点検・評価の責任者に指名された時、直近の課題は大学等に対し新たに義務付けられた認証評価への対応であった。未知の外部評価に対応するためには膨大な量の作業が予想されたため、その一部を分担してもらう主要な要員として蒲生先生に白羽の矢を立てたのである。蒲生先生とは学問分野が異なり、それまで幾つかの会議で同席する事があった位の間柄でしかなかったが、蒲生先生の会議での発言は常に筋が通っているとの印象が強く残っていて、神奈川県立湘南高等学校の同窓生であり、同じ喫煙者でもあるとの安心感もあり、学術的な営為とはほど遠い点検・評価作業にも注力して頂けると期待してのことだった。

蒲生先生はその期待を裏切ることなく、「(学)内には厳しく(評価し)、(学)外には優しく(説明する)」という方針の下、学内から上がってきた多岐にわたる膨大な量のデータを厳しい目で分析し、それに基づき穏当な評価書を作成するという面倒な作業の分担者として大いに活躍して下さった。評価書の提出期限が近付いてくると、深夜まで書類作成作業を続けなければならなくなり、時には学内で徹夜することもあったが、蒲生先生は教育・研究という

本来の業務で多忙の中、その深夜の作業にも必ず付き合ってくれた。その結果として、本学にとって初体験となる第1回の認証評価、それに続く第1期中期目標期間の国立大学法人評価を無事乗り切ることができ、それも予想以上に高い評価を受けることができた。そして、私が責任者を降りた後も、蒲生先生は私とともに引き続き点検・評価活動を担当して下さったのである。

茅ヶ崎に住む蒲生先生と横浜の南端に住む私とは帰宅方向が途中まで同じなので、私が車で帰宅する際に、何度か蒲生先生を自宅近くまでお送りしたことがある。茅ヶ崎に向かう途中、深夜であったがちょっとだけ藤沢に寄り道して、出身校である湘南高校の近くで車を降りて、ネット越しに懐かしいキャンパスを一緒に眺めたのも良い思い出である。

蒲生慶一先生のご冥福を心からお祈り致します。

